

マタイ27章22節 「イエスを私はどうするのか？」

1A 総督ピラトの葛藤

1B 内なる思い

2B 外部からの圧力

2A 群衆を宥める努力

1B 凶悪犯とイエス

2B 鞭打ち

3B 手洗い(決断しないという決断)

3A 決断に迫られるピラト

1B 無関心から決断へ

2B 意見の二分

3B 比類なきお方

4A ピラトの裁判席とイエスの御座

1B 変えられた人生

2B 拒んでも変わらない方

3B 変えられる定め

本文

マタイによる福音書 27 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、26 章まで来ました。午後礼拝において、27 章の前半だけを見て行きます。イエス様が十字架に磔にされる大切な章ですが、27 章全体を見て行くにはあまりにも内容が多すぎます。それで二つ分けることにします。今朝は、その前半部分から 22 節に注目したいと思います。「**ピラトは彼らに言った。『では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。』**彼らはみな言った。『**十字架につけろ。**』」イエス様を十字架刑に処したのは、他にもないローマ総督ピラトです。そのピラトが、「**イエスを私はどのようにしようか。**」に問うている場面です。ピラトは裁判席に着いているのですから、自分で決めればよいことです。しかし、どうして群衆にその判決を任せるような物言いをしているのか？ということが、大きな疑問として出てきますね。ここでは非常に異様な光景になっているのです。

1A 総督ピラトの葛藤

私たちは前回、ユダヤ人たちが自分たちの議会でイエス様を死刑にする判決を下しました。けれども、当時、ユダヤ人たちは死刑を執行する権限をローマから剥奪されていました。それで、彼らはローマ当局に、イエスの身を引き渡し、ローマによって死刑を執行してもらわなければならないのです。それで彼らは、時の、ユダヤ属州のローマ総督であるピラトに引き渡しました。

けれども、ちょっと考えていただきたいのですが、宗教の中で異端であるとか、冒涇であるとか言っても、それが必ずしも、世の中にある法律で裁くことは難しいですね。例えば、日本の政治家でかつて、「又吉イエス」という人がいました。いつも落選しているのですが、自分が神として政治を直接見る時期が来たとして、イエス・キリストの再臨宣言を行いました。私たちは、まさにイエス様が言われた、「わたしを名乗るものが大勢現れる」と言われた人物の一人であり、偽預言者や偽キリストは厳しい裁きを神から受けることを知っていますし、そう言った人物が教団を作るものなら、統一協会に対するのと同じように、異端宣言をします。でも、このような教義上の異端を、日本国の裁判所で無罪判決にすることはできるでしょうか？いいえ、できませんね。

1B 内なる思い

ですから、かなり無理があったのです。彼らは、いろいろな偽証を持って行きましたが、その中の一つが「ユダヤ人の王であると言っている」というものです。ローマにおいてカエサルのみが王です。他に王がいるということは、深刻な反逆罪ですからそれを訴状として取り上げました。けれども、イエスに尋問しても、「わたしの国は世のものではありません。(ヨハネ 18:36)」と言われまです。ピラトはすぐに、これはユダヤ人の宗教上の話であって、物理的なローマに対抗しているものではないことは、明らかでした。どうしても死罪に当たる罪を見つけることができません。

実は、他の多くの方が、イエスは無実であることを証言しています。イスカリオテのユダでさえ、イエス様が無実であると言って、その売ったことを後悔しました。ピラトの妻が、ピラトに対して「あの正しい人と関わらないでください。」と言いました。そして十字架に付けられたイエス様について、その一部始終を見ていた百人隊長は、「本当にこの方は正しい人であった。(ルカ 23:47)」と言いました。イエス様には非の打ちどころがないどころか、そこに聖さ、正しさが強く裏打ちされていて、神への恐れが与えられるものでした。

総督ピラトは、ユダヤ教については全く知らないのですが、それでもイエスが死刑を犯したような重罪は元より、犯罪を犯しているようには全く思えないことは心の中で知っていました。それで、彼は何度も何度も、群衆や祭司長らに、「あの人がどんな悪いことをしたのか。(27:23)」と尋ねています。

2B 外部からの圧力

彼は内側では、強い葛藤を覚えています。イエスが正しい人で、無実であることを十分に知っていました。ところが、群衆が、イエスとバラバのどちらを釈放してほしいのかと尋ねたら、「バラバだ。」と答え、イエスを私はどのようにしようかと尋ねると、「十字架につけろ」と叫ぶのです。ピラトにとって、ローマ皇帝にユダヤ人をよく治めないことが伝わったら、自分の統治能力を疑われて、罷免されることも十分あり得ました。ですから、群衆からの圧力に屈することなく無罪の判決をして暴動でも起こるものなら、とんでもないことになるという圧迫を感じました。内ではイエスは無実、

正しいと分かっていたのですが、外部からの圧迫で自分が間違っていると分かっていることを行わなければいけないという、ジレンマに立たせられていたのです。

いかがでしょうか？今の言葉で言うなら、「同調圧力」です。心ではそうではないと思っけていても、他者からの圧力で不本意な選択していくのですが、空気のようにその圧力を感じないでしょうか？そういった圧力を感じて、それでも正しいことをするには、相当の勇気が必要です。けれども、これから見ていくのは、外部からの圧力と同調する生活は、自分自身に滅びさえ招いてしまうという警告です。そして、99人が右と言っている、イエス・キリストについては、堂々と左と言うことが、いのちへの道なのだということを見て行きます。

2A 群衆を宥める努力

1B 凶悪犯とイエス

ピラトは、その群衆の圧力がとてつもなく強いので、彼らを宥めようとしていきます。これは、圧力を少なくするための方策です。ローマ総督は、ユダヤ人の祭りの度に、ユダヤ人たちを喜ばせるため、誰かを特赦にしていました。それでピラトは、愛国とは名ばかりの、殺人者にしか過ぎなかったバラバを彼らの前に連れてきました。つい数日前まで、宮の中で教えていたイエスは、群衆によって支持されていたし、バラバはとんでもない凶悪犯であることはユダヤ人自身が知っているから、当然、バラバではなくイエスを釈放させるだろうと思っていました。ところが、彼らは「バラバだ。」と叫びます。

2B 鞭打ち

そして、ピラトは鞭打ちをするように命じます。これが、とてつもなく血が噴き出る、打たれているうちに失血で死んでしまう者たちが続出する恐ろしいものです。イエス様がその鞭打ちを受けて、それで血を見て、彼らが受け入れてくれるものだと思っていました。(マタイには出てきませんが、ヨハネの福音書に詳しく出てきます。)ところが、彼らはやはり、「十字架につけろ」と叫びます。

つまり、ピラトは群衆を宥めようとしたのですが、彼らを宥めることはできなかったのです。私たちは他の人々から受ける圧力について、自分が折れさえすればそれで満足してくれるかもしれないという甘い期待をします。けれども、それは本当に、甘い期待です。人々の欲望は、宥めることはできないのです。悪というものは、宥められません。

3B 手洗い(決断しないという決断)

そしてついに、ピラトは、手を洗います。「27:24 ピラトは、語る事が何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」こうやって、あなたがたが決めたことだから、私には責任がないとしています。けれども、果たして責任がないのでしょうか？いいえ、イエス

様はピラトに、「わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があります。(ヨハネ 19:11)」と言われました。祭司長たちにもっと大きな罪があると言われましたが、もっと、と言っているのですから、ピラトにも罪があるということです。

ピラトの大きな過ちは、何だったのでしょうか？それは、「決断しないという決断を下した」ことです。多くの方が大きな過ちを犯しています。それは、「決断をしなければ、中立になれる」ということです。多くの場合、決断をしないことは、正しいことをしないだけでなく、悪を行なっているのと変わらなくなるのです。ある哲学者が次のことを言いました、「悪が勝利するために必要なたった一つのは、善良な人たちが何もしないことである。」¹特に、神の真理そのものであられるイエス様については、中立でいることはできません。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしともにも集めない者は散らしているのです。(マタイ 12:30)」

3A 決断に迫られるピラト

1B 無関心から決断へ

ピラトとしてみては、ユダヤ教のことについて、ましてやイエスの事については、自分の関心の範疇から大きく外れています。全く無関心でありました。ところが、彼は無実の人を十字架刑に処する決断を下すほどに、引きこまれていったのです。なぜかと言えば、イエスご自身がそのような方だからです。イエス様について、その方を知ればそれだけ、引きこまれていきます。この方について、無関心のまま、中立のままではいられなくなるからです。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」という言葉は、裁判官であるピラトが発した言葉だけではなく、人間一人一人が、迫られる言葉であるわけです。イエス様に対して、自分はどのようにすればよいか？ということでもあります。

2B 意見の二分

イエス様について、ユダヤ人たちの間で意見が真っ二つに分かれたことが、ヨハネ7章に書いてあります。「7:11-13 ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを探していた。群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。」良い人だという人もおり、いや、群衆を惑わしているのだという人もいました。どちらでもない、ということができなかったのです。

先日、経営者の方々向けに、イスラエルのベンチャービジネスを紹介し、その背後にある聖書の考え方についてお話しました。私は、「聖書を読んだら、本当に変な話ばかりが出てきて、これをまともに信じてもらおうという気がないのではないかな？と思われる事すらある。」ということをお話しました。信じてもらいたいならば、分かり易く、中立でいて、あまり、人をつまづかせるようなことは書

¹ <https://sekihi.net/stones/33829>

かないほうがよいと思うのですが、その逆を行っているからです。むしろ、あまりにも飛躍しすぎているようなことをイエスが言われて、行われているから、「とても反発が出て来るけれども、どうしても気になってしまう人」のような存在であることをお話ししました。

3B 比類なきお方

なぜ、そうになってしまうのか？意見が真っ二つに分かれ、また自分自身の中にも「反発するのに、気になって仕方がない」というような、相矛盾する反応が生まれるのでしょうか？それは、イエス様が比類なき方だからです。比類がないというのは、比べることができない、独特だということです。他に比較できる対象がなく、あまりにも超越し、偉大だということです。

イエスが生まれる前から比類なきお方でした。世界にどこに、宗教においても、他の人間でも、その人が世に現れる以前に、前もってその出現を告げられていた人物はいるでしょうか？いいえ、誰もがその人の生涯が知られるようになって、死後にその弟子たちのような人たちによって言い広められています。仏陀がそうですし、ムハンマドもそうです。しかしイエスは、その出現の数百年前、千年以上前から、詳しいを預言者によって前もって告げられていました。

そしてその誕生自体が、比類なきものです。処女から聖霊によって生まれたというのです。そしてその時は、遠い東からの国から賢者がやって来て、星を見ていたらこちらにユダヤ人の王がいると言って、エルサレムを訪問したのです。そんな赤ん坊がどこにいるのでしょうか？

そしてイエスが成人して、公生涯を始め、何を行われたかと言えば、奇蹟です。死に至る病にかかっていた人を一瞬にして癒される場面が数多く出てきます。また、癒しや回復は全く見込まれない人、たとえば盲目の人や、耳が聞こえない人について、イエス様はそのままお直しになりました。そして悪霊を追い出されています。また、水の上を歩かれています。嵐を静めることもなさいました。他に誰が、このような奇蹟を行うことができるのでしょうか？

そして、この方は言葉において、あまりにも権威があり、気が滅入るほどです。ご自身が神殿におられた時に、宮清めを行われたのですが、「わたしの父の家を商売の家にはならない。(ヨハネ 2:16)」と言われたのです。神をあがめ、礼拝するところについて、お父さんの家なのだと突然言われるのです。つまりイエスは単なる人間ではない、神の独り子だということです。イエス様は、そこで「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。(ヨハネ 14:6)」と言われました。そして、「わたしと父とは一つです。(10:30)」と言われました。天地を造られた神とご自身を同一にしているのです。

そしてイエスが死なれる時も独特です。だれが、正しいとみなが証言しているのに、極悪人と等しい極刑を受けなければいけなかったのでしょうか？これだけでも衝撃です。そして十字架に付け

られている時、正午なのに空が真っ暗になりました。死なれた時は地震が起こって、神殿の幕が上から下に裂けました。

そして、この方を他にして、その墓が空だと言う人はいるでしょうか？つまり、よみがえったのです。今でもロシアでは、レーニンがホルマリン漬けにされていて、今でも眠っているかのような表情を持っています。けれども、イエスは遺体さえないのです！なぜなら、生き返り、今も生きているからです。ですから、これだけ他と比べようのない方ですから、反応としては「全く拒むか、あるいは全面的に受け入れて、この方を自分の主とするか？」のどちらかでしかないのです。

4A ピラトの裁判席とイエスの御座

そうしているうちに、実は、裁いている本人が実は被告人の席についているというか、裁かれていることに気づきます。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」と彼は言いましたが、実は、「自分がイエスによってどうされるのか？」ということに気づいて行きます。ピラトがイエス様に、「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」と言ったら、イエス様が、「上から与えられるのでなければ、あなたはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。(ヨハネ 19:10-11)」と言われたのです。ユダヤ人の大祭司に対しても、イエス様はそうでしたね。大祭司が裁判の席に着いていたけれども、イエス様はご自身が神の右の座に着いて、天の雲に乗って戻って来られると言われました。裁き主として戻って来られるのです。ご自身が王の王であり、大祭司はご自身によって裁かれるとされたのです。

そうなのです、イエスが一体どんな存在なのだろうと推し量っているうちに、実は、自分自身がイエスからどう見られているのか、この方にどう裁かれるのかという、健全な恐れが出てきます。自分が心の王座に自分を置いていたとしても、自分が中心だと思っていなくても、実はイエスが中心なのです。

1B 変えられた人生

この方が比類なき方であるもう一つの理由は、イエスによって変えられた人生が数多くあるということです。この方が分かった、理解できたということではありません。イエスによって、私は前の自分ではありません。変えられましたという人々が、あまりにもたくさんいるのです。自分がいえずをどうにかしたのではなく、イエスが自分をどうにかされたのです。この方によって、どれだけの壊れた結婚が修復されたことでしょうか。この方によって、どれだけの人が自殺願望から救われたでしょうか？(私はその一人です)この方によって、依存症からどれだけの人が脱却できたでしょうか？この方によって、どれだけの悪者あるいは自己中心的な人が、他者を愛するようになったでしょうか？この方によって、敵対していた民族同士が、一つにされて平和の絆で結ばれているでしょうか？数限りない人生の変化があります。

そして、歴史はこの方によって変えられました。日本も変えられました。どれだけの病院や学校が、キリストの御名によって設立されたでしょうか？この方は全ての人間の歴史を変えてしまわれました。

2B 拒んでも変わらない方

ですから、自分は変わることがあっても、相手は変わらないのです。私たちはピラトのように、このイエスを自分はどうすればよいのか？と悩むかもしれませんが、イエス様の方は全くびくともしません。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。(ヘブル 13:8)」パントマイムで、ある若者たちがイエス様とこの方を受け入れる人、また拒む人を演じているのがありました。拒んでいる人がイエスから背を向けたところで、イエス様は全く変わらずにそこに立っています。私たちは、この方を拒めば、この方が消えてくれるものだと思っています。しかし、全くそんなことはないのです。

3B 変えられる定め

ですから、変えられるのは自分のほうです。イエスは変わりませんが、自分の定めは受け入れるか、受け入れないかで正反対になるのです。「ヨハネ 3:17-19 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。」御子を受け入れる者は救われ、命を持ちます。信じない者は、裁かれているとのことです。イエス様を受け入れるか、退けるか？それは、イエス様の命を持つか、あるいは持たないで滅びるかの道だと言うことです。